

# 生涯学習施設としての公共図書館 — 「体験」は図書館サービスなのか —

## The Public Library as a Lifelong Learning Facility: Is “Activity” a Library Service?

日向良和  
HINATA Yoshikazu

### 目次

図表目次

抄録

はじめに

#### 1 新しい図書館の姿

- 1.1. 住民の活動拠点として「武蔵野プレイス」
- 1.2. 新しいまちづくりの一部として「オガールプラザ（紫波町図書館）」
- 1.3. 図書館・博物館・公民館の融合施設として「ふくちのち（福智町立図書館・歴史資料館）」
- 1.4. 住民に必要な機能を集約した施設として「えんぱーく（塩尻市立図書館）」

#### 2 「読む・調べる→考える→やってみる」へ

引用文献・参考文献

### 図表目次

表 1 えんぱーくに入っている機関・企業

- 図 1 紫波マルシェにある図書館資料案内（2016-03-06筆者撮影）
- 図 2 図書館内のバンドスコアコーナー（2016-03-06筆者撮影）
- 図 3 図書館入り口の調理室を借りて地元蕎麦店営業（2016-03-06筆者撮影）
- 図 4 図書館内にある博物館展示資料（2017-03-26筆者撮影）
- 図 5 図書館内工作室の工作機（2017-03-26筆者撮影）
- 図 6 図書館エントランス（2017-03-26筆者撮影）
- 図 7 静寂なスペース（旧町議会本会議室、2017-03-26筆者撮影）

<sup>1</sup> 本論文はクリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンスの下に提供されている。



## 抄録

近年新設された公共図書館において、調理室や工作室、音楽スタジオ等を同一建物内に備えて、調理、3Dプリンタ等出力、バンド練習など、さまざまな体験活動をおこなうことができる図書館が出現している。これらの活動がおこなわれている図書館を訪問し、その共通する特徴として、「読む・調べる→考える→やってみる」という活動の特徴があることを認識した。この認識を基に、これまでの公共図書館でおこなわれてきた資料・情報提供サービス(読書含む)の他に、これらの体験活動をサービスとして提供することの是非を検討した。本稿では体験活動を公共図書館の役割を越えるものであるとし、生涯学習施設における図書館機能の提供と位置づけ、否定的なものでない結論づけた。

## はじめに

この3年ほどの間に日本で新館が開館した公共図書館では、図書館もしくは同一の施設の中において、さまざまな「活動」を行うことができる施設が見られる。具体的には公民館機能との合築の中で、調理室や工作室、ディスカッションルームや、ダンス、音楽演奏、演劇練習等のできるスタジオなどを同じ建物にておこなうことができる施設である。

公民館との合築で、ホール等が図書館と同一の建物内にある図書館は、これまでも見られたが、近年の新しい図書館においては、図書館情報資源、サービス、イベントとの密接な連携をおこない、さらに図書館内にこれらのスペースを設ける形で、より積極的に「取り込む」姿勢が見られる。

これらの活動はそれぞれの住民には好意的に受け入れられているようにも感じられるが、従来の公共図書館の姿や、公共図書館としての原理的な在り方から、その役割がはみ出つつあるようにも思える。

本稿ではこの疑問を基に、まず筆者が訪問した図書館を中心に、「体験」をおこなうことのできる図書館の事例を紹介した上で、それらの図書館と従来の図書館の姿を比較し、新しい図書館の姿なのか、それとも図書館ではないのかを検討する。

## 1 新しい図書館の姿

### 1.1. 住民の活動拠点として「武蔵野プレイス」

「武蔵野プレイス」は、東京都武蔵野市のJR中央線武蔵境駅前にある施設である。筆者は2015年12月5日に見学をおこなった。武蔵野プレイスを武蔵野市より指定管理者として受託している、公益財団法人武蔵野生涯学習振興財団は下記のとおり武蔵野プレイスの機能を規定している。

「武蔵野プレイス」は、図書館、生涯学習センター、市民活動センター、青少年センター

などといったこれまでの公共施設の類型を超えて、複数の機能を積極的に融合させ、図書や活動を通して、人とひとが出会い、それぞれが持っている情報（知識や経験）を共有・交換しながら、知的な創造や交流を生み出し、地域社会（まち）の活性化を深められるような活動支援型の公共施設をめざしています。<sup>1)</sup>

武蔵野プレイスは武蔵野市立西部図書館の移転を契機に、その機能を拡充、拡張した上で、これまで別の施設であったいわゆる公民館等と図書館を融合させ、創造や交流を生み出し、もって地域活性化に資する公共施設を目指すとして上記に明記されている。

事業団理事長の前田陽一によると、武蔵野市では1989年に教育委員会が直接運営をおこなうのではなく、武蔵野生涯学習振興事業団という公益財団法人を作り、生涯学習の推進という大きな目標を達成するため各種施設を一体として運営させることとした<sup>2)</sup>。さらに前述のとおり、建物についても西部図書館の移転を契機に1体として整備し、機能についてもフロアごとのゾーニングはあるが、1フロア内でも複数の機能を盛り込んだ施設となっている。

武蔵野プレイスの機能を施設ホームページ<sup>3)</sup>と筆者の感想を踏まえて具体的に紹介する。大きく分けて図書館、生涯学習支援、市民活動支援、青少年活動支援の4つの機能に分かれている。

まず図書館機能である。図書館機能の中心は地下1階および2階にある。地下1階は一般的な公共図書館としての蔵書、閲覧席、情報検索のための席が設置されている。2階は児童サービスフロアと、市民生活に直接役に立つ情報をテーマごとに配架したテーマ展示となっている。特に、2階の「テーマライブラリー」は武蔵野市の住民課題に直接答えるテーマが設定されており、3階の市民活動の情報源となることが期待される。

これ以外に図書館としては地下2階にアート・ティーンズライブラリーがあり、ここには、地下2階の青少年活動支援の内容に関係する芸術や青少年向けの小説などが配架されている。一般的にはこども図書館機能の一つと分類することが妥当ではあるが、筆者が地下2階のライブラリーおよび、フロア全体を見た際の印象としては、このライブラリーは図書館という枠組みではなく、青少年活動支援機能の中の情報提供機能と考えられる機能であると感じた。このライブラリーは防音のためガラス仕切りによって地下2階のスタジオオーラウンジと区別されているが、出入りは自由であり配架資料の選択も、地下2階での青少年の演劇や音楽活動に資するためのものが多数である。つまり、このライブラリーの資料は、他フロアの図書館における館内閲覧や貸出を主たる目的として配架されているのではなく、地下2階での青少年の活動に情報を提供するために設置されていると考える方が妥当であるとの印象を受けた。資料の管理については司書、図書館がおこなっているが、実際の利用の目的は図書館サービスとして捉えられるのではなく、青少年支援サービスとして受け止められると考える。図書館としての枠組みの中にテーマ展示などとして資料を配架するのではなく、図書館サービスを目的としないフロアに図書館的機能をそのフロアの目的に合わせて設置している点は他の図書館には見られない特記すべき点である。

次に市民活動支援・生涯学習支援である。フロアとしては3階、4階であり、3階の市民活動支援センターを中心として、さまざまな市民団体の活動場所や助言などを提供している。また自由大学といった生涯学習プログラムが3階、4階のフロアで展開されて

いる。前述のとおり2階のテーマライブラリーがすぐ下にあり、市民活動や生涯学習に必要な情報をすぐに探すことができ、2階のテーマライブラリーは、階層が違うが生涯学習支援、市民活動支援機能の中の図書館的機能と位置づけることが可能である。3階には近年公共図書館に多く設置されているオープンスペースや、会議・学習スペース（比較的少人数）が配置されており、これらは後述の図書館や富山市立図書館、山梨県立図書館にも共通して配置されている。

最後に青少年活動支援機能である。前述のとおり青少年活動支援機能は地下2階に集約され、青少年同士のコミュニケーションの場を中心として、アート・ティーンズライブラリー（図書館的機能）、音楽、演劇活動スタジオ、軽運動スペースなど青少年に特化したスペースが配置されている。地下2階のスタジオ等を大人は利用できない。筆者が訪れた際も、大人の目を気にせず青少年が気兼ねなく活発に活動していた。従来一般的な図書館の運営方法であれば、これらのフロアでアート・ティーンズライブラリーの資料を利用しようと考えたら、貸出カウンターにて貸出をおこなって、一度図書館から退出した上で利用させることが一般的であろう。しかし、前述のとおり、アート・ティーンズライブラリーは青少年支援機能の中の図書館的機能であり、資料をもったまま自由に行き来が可能である。また仕切りもガラスで中が見通せるようになっており、地下2階の青少年支援という目的で一貫してサービスが組み立てられていることがうかがわれ特色となっていると言える。

一階はこれまで説明してきた機能のエントランスであり、また市民活動の成果が社会に公開される場所でもあり、渾然一体となった場所となっている。スペース的には図書館の新刊コーナーや雑誌閲覧コーナーが広くとられているが、コンサートも開かれるギャラリーといった市民活動、生涯学習活動の発表の場や、カフェといった交流の場も半分程度とられており、図書館利用者、市民活動グループ、生涯学習者、青少年がそれぞれ交流、情報交換のできる場所になっている。従来図書館においては資料管理の考え方から複合館であっても入り口を別にしたり、BDSの設置により資料の持出などが制限されたりしているが、武蔵野プレイスではより自由な形で情報交換、交流がおこなわれている。

武蔵野プレイスを小括すると、生涯学習における地方自治体がおこなうべき施設を機能面で切り分け（図書館機能、生涯学習支援機能、青少年支援機能、市民活動支援機能）、フロアの目的にあわせてそれぞれの機能を配置することで、フロア内での活動ではこれらの機能が一体となって提供されているように感じられた。

武蔵野プレイスは2011年のLibrary of the Yearを受賞している。しかしCinii Articlesなどを「武蔵野プレイス」で検索すると建築系雑誌の記事はあるが、図書館情報学系の雑誌での記事は比較的少ない。武蔵野プレイスに対して批判的な言説としては、田井郁久雄氏が自身発行の雑誌で発表したエッセイ『武蔵野プレイス—いま話題の図書館の特徴—』がある。エッセイで田井は利用者の多い日曜午後に2時間程度滞在し、各フロアを回った上で、全体として“図書館の基本的機能である資料提供に集中できず、焦点がぼやけている”<sup>4)</sup>と感想を述べている。田井は“資料・情報の提供という役割は図書館でしか果たし得ない。催しや場の提供は図書館でなくても別の施設でも可能”<sup>4)</sup>とし、図書館とその他の施設は目的が同じであっても、目的を達成するための手段、サービスが異なっているのだから、図書館とは峻別し、図書館として建設するのであれば、資料提供に特化すべきであ

ると主張している。田井の批判については、本論で取り上げる他の施設や、これから地方で建設が予想される複合施設、生涯学習施設にある「図書館」をどう規定するかに重要な視点を提供している。

## 1.2. 新しいまちづくりの一部として「オガールプラザ（紫波町図書館）」

紫波町図書館は、岩手県盛岡市から南に近い場所にある紫波町に2012年に建設された図書館である。紫波町図書館を含む一体は、JR東北本線紫波中央駅駅前再開発として、町役場や住宅分譲地、図書館を含む生涯学習施設、宿泊施設などを集約して開発されたオガール紫波プロジェクトの一部となっている。

紫波町図書館が入る建物は「オガールプラザ」と規定されており、その特徴は

*産直・カフェ・クリニック・学習塾などの民間テナントと、紫波町が運営する交流館・図書館・子育て応援センターで構成される「官民複合施設」。*<sup>5)</sup>

と規定されいている。一つの建物に食、医、教育、子育ての機能を民間、官営を問わず盛り込んでいるところが、他の施設にない特徴であろう。

オガールプラザの一つ一つの施設は独立しており、紫波町図書館も町直営の図書館である。これは複合施設では一般的な作りであり、武蔵野プレイスや後述のふくちのちのような融合を目指す施設の方が現状では少数である。筆者は2016年3月に訪問した。

紫波町図書館の建物については町立の小規模図書館であり、他の図書館と比べて特色になるものはない。しかしオガールプラザの他施設との連携サービスとしての「紫波町図書館×紫波マルシェ」サービスは特色のあるサービスである。このサービスはオガールプラザ内にある紫波町の産直販売所「紫波マルシェ」で販売されている農作物に、紫波町図書館に所蔵されている料理本などにある料理を紹介し、レシピ詳細については図書館資料への参照を案内するポップを、販売物近くに掲示しているサービスである。



図1 紫波マルシェにある図書館資料案内（2016-03-06筆者撮影）

また、オガールプラザ内には、図書館の他に調理室、音楽スタジオ、工作スタジオが併設されており、これらでは高校生と思われる生徒たちが、バンドの練習をおこなっていたり、調理室では地元の蕎麦店が簡易営業をおこなっていたりと、さまざまな形で利用されている。バンドの練習がおこなわれていたスタジオは、武蔵野プレイスにもみられ、地方で貸しスタジオが少ないか無い地域において、重要な生涯学習スペースを提供している。図書館内にもバンドスコアなどをコーナーとして収集している。

また調理室は図書館入り口のすぐ近くにあり、前述のレシピに従って野菜を買い、図書館でレシピ本を借りればすぐ作ることができる。訪問当日は蕎麦店が営業していたが、カフェや地元の食品店に貸し出すことも考えられ、例えば新メニューの試作・試食などをするなかで、アイデアとして図書館資料などの活用をおこなうことができる。

従来調理室、スタジオなどは公民館の施設であり、図書館とはにおいや音の問題で別棟になる場合もあったが、建設経費などの節約も考えて合築し、図書館機能を結びつけることでプラスの効果が期待できるのではと考えられる。

紫波町については「まちづくり」という中で注目されており、駅前の再開発という点では武蔵野プレイスとの類似点も多い。一方武蔵野プレイスが東京都多摩地域という人口密度が高い都市部にあることに比べ、紫波町立図書館は人口密度が低く、盛岡市へ仕事で通勤する方の多いベッドタウンであり、主な移動手段が自家用車、主たる産業が農畜産業という背景の違いもある。紫波町立図書館を含むオガールプロジェクトでは、市街地の集約化による効率化という面もあり、武蔵野プレイスとは違いを見ることができる。

紫波町図書館は紫波マルシェという商業施設に、図書館として資料紹介をおこない、図書館資料と結びつけることで、オガールプラザの建物における図書館的機能を提供している。また、調理室やスタジオなどについても図書館資料を提供することができる。武蔵野プレイスと同様に、活動場所と図書館資料が非常に近接しており、オガールプラザとして生涯学習機能を提供していると見ることができる。

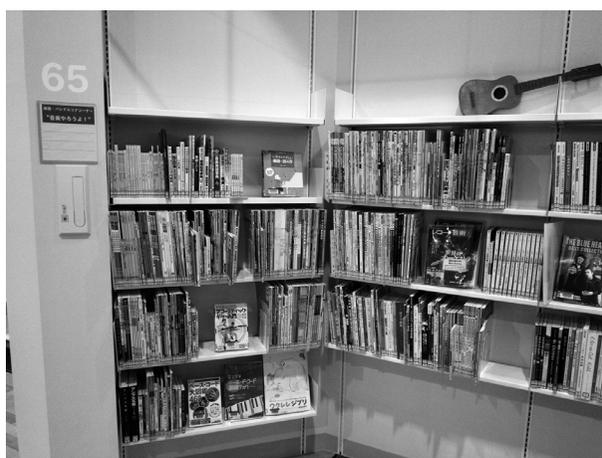


図2 図書館内のバンドスコアコーナー (2016-03-06筆者撮影)



図3 図書館入り口の調理室を借りて地元蕎麦店営業 (2016-03-06筆者撮影)

### 1.3. 図書館・博物館・公民館の融合施設として「ふくちのち (福智町立図書館・歴史資料館)」

福岡県福智町は、町ホームページ<sup>6)</sup>によると、平成18年の平成の大合併時に、旧赤池町、旧金田町、旧方城町が合併してできた町である。福智町は筑豊炭田の一部として栄えていたが、炭鉱閉鎖後には町の人口が減り、旧赤池町は財政再建団体でもあった。

「ふくちのち」は旧赤池町役場を改装し、図書館と歴史資料館を融合した施設であることが他の図書館と大きく違うところである。併設や複合ではなく、博物館資料が図書館書架の中に展示されており、さらにその博物館資料を説明する図書館資料が配置されているという非常に特徴的な図書館・歴史資料館である。(本稿では便宜的に図書館とする)



図4 図書館内にある博物館展示資料 (2017-03-26筆者撮影)

また、ふくちのち内には、調理室、工作室、会議室が併設され、本を読んで感じた、考えたことをプレゼンテーションしたり、作ってみたりすることが可能となっている。



図5 図書館内工作室の工作機 (2017-03-26筆者撮影)

工作器具としてはレーザーカッター、3Dプリンタ、カッティングマシンといった工作機が備え付けられ、それらを使った工作ワークショップが開かれている。訪問当日はレーザーカッター等を使いフィルムなどを切り取り、工作室椅子のオリジナルデザインを作るワークショップが開かれていた。工作室外にはデザイン参考書や、デザインソフトウェアの参考書、工作機器の使い方など、工作室に関する資料が配置されている。3DプリンタとCGを使えば、感じたことを造形化することも可能であると考えられる。

他にも紫波町と同様に調理室があり、その場で調理したものを食べることができる。旧町役場のエントランスは広いスペースとなっており、音楽会や映画鑑賞会なども開くことができる。2階建て建物の中心部エントランススペースは吹き抜けであり、音がそのまま響いてしまうが、図書館としては静かなエリア(旧町議会本会議室)を設定し、演奏会などもそのまま開けるようにしている。



図6 図書館エントランス (2017-03-26筆者撮影)



図7 静寂なスペース（旧町議会本会議室、2017-03-26筆者撮影）

ふくちのちは武蔵野プレイス、紫波町図書館の後発ということもあり、図書館と博物館、公民館の機能がより融合し、図書館は生涯学習施設の情報提供機能にさらになっている。「ふくちのちは図書館であるか」という根源的な問いに対して、図書館であると回答することは難しく感じる。また、図書館であることにこだわる必要があるのかという問いも発生している。これらの問いについて、筆者は図書館を包摂する生涯学習施設という枠組みで検討したい。

#### 1.4. 住民に必要な機能を集約した施設として「えんぱーく（塩尻市立図書館）」

「えんぱーく」は長野県塩尻市にある、市民サービスとまちづくり機能を集約した複合施設である。えんぱーくの中には、次表にあるさまざまな官民機関が入っている。

表1 えんぱーくに入っている機関・企業

	市民交流センター	えんぱーく
5階	イベントホール	オフィス P'dj
		株式会社テレビ松本ケーブルビジョン 塩尻支社
		一般財団法人 塩尻市振興公社
		塩筑歯科医師会
4階	会議室401A～B	塩尻市ふるさとハローワーク
		塩尻市ブランド観光商工課
		塩尻商工会議所アクサ生命保険
		特定非営利活動法人 SCOP
		長野県デザイン振興協会
		株式会社しおじり街元気カンパニー
		交通教育とらふいっく sisters
		医療法人新正会 えんぱーく 歯科クリニック

3階	会議室301～会議室306	
	多目的ホール	
	音楽練習室 1～3	
	食育室	
	市民サロン	
	学習室 (画像)	
2階	総合受付 図書館	
	ICT ルーム (画像・料金等)	
	会議室201～会議室204 (画像・料金等)	
	フリーコミュニティ	
	パソコンコーナー	
	市民交流センター事務室 (交流支援課)	
	協働オフィス	
	◆ 地域活動応援チームえんのわ	
	◆ 信州ファンドレイジングチーム	
	◆ NPO 法人長野県キャリア & カウンセリング研究会	
	◆ えんぱーくらぶ	
	◆ プロボノグループパレット	
	◆ 市民活動支援係 (分室)	
1階	図書館	Café ういずの森
	子育て支援センター	カフェバーカーリー「プチ・ル・ノール」

えんぱーくホームページ (<http://enpark.info/> 2017-06-05参照) を元に筆者作成

えんぱーくでは、まちづくり、商業振興関連部署と、図書館を含む生涯学習に関連する市役所各機関、部署を一つの建物にまとめたことが特徴である。通常商業振興関連部署は市役所本庁内に置かれることがおおく、さらにハローワークなどの厚生労働省の施設や民間企業、公社なども一つの建物に集約している。まちづくり、商業振興という目的が同じ機関を一つの建物に集約することは合理的ではあるが、設置母体が塩尻市、国、民間となっている機関をまとめること自体が大変なことである。

また、市の市民交流センターと図書館が併設されている。福祉部局の管轄である子育て支援センターが、子ども連れが良く来る図書館の児童コーナーに併設されていることも、市民交流や子育て支援という目的で、管轄の違う市役所部署を機能でみて集約した例となっている。

設置母体や管轄を越えて、類似のサービス目標を持つ複数機関をまとめていることが、えんぱーくの大きな特徴であろう。機関同士の連携がとれているかについては疑問があるが、別の建物にあるよりも確実に相談、連携はしやすくなっており、市民からしてみれば一つの建物でサービスが完結する形となっている。

えんぱーくもこれまでの図書館と同様、音楽練習室や調理室（食育室）、学習室が設置され、図書館機能と合わせてやってみる、つくってみるという体験が同一建物においておこなうことができる。

## 2 「読む・調べる→考える→やってみる」へ

ここまでの複数図書館の事例は、筆者が訪問した図書館であり、訪問先を選定するにあたって、情報提供だけでなく、さまざまな体験や創造をおこなっている図書館を選んで訪問しているので、一般的事例とすることはできない。

これらの事例をみると、資料・情報を提供し、思考、分析して仕事、学習、生活などに役立てるといふこれまでの図書館の役割に加えて、試してみる、作ってみるといふこれまで図書館外や公民館にておこなわれていた活動が図書館内にみられる。それぞれの図書館の建設時に複合施設化という流れの中で、ただ建物を複合させるだけでなく、機能を分析し、建物全体としての目的を設定した上で、図書館、公民館、博物館他の持つ機能を取り入れている。武蔵野プレイスやふくちのちでは、図書館は図書館機能のサーバーとしてあり、図書館と他機能との境界はあいまいである。えんぱーくや紫波町図書館でも、建築物としては階や壁があるが、同一建物内にあるとすれば、あいまいな境界となっている。

この境界のあいまいさは「図書館」として考えた際に受け入れられるかという課題がある。前述の田井郁久雄は長野県小布施町の図書館を見学したエッセイに、複合施設についてこう記述している。

*“図書館施設の複合化、特に管理や機能の複合化や拡大によって、生涯学習や文化施設の領域に幅を広げる試みは、近年の図書館の歴史の中で何度も繰り返されてきた”*

*“話題になるのはつかの間で長続きせず”*

*“肝心の図書館の基本的機能は弱体化”*

*“資料提供という図書館の基本を怠った図書館が、この先、長年にわたって、地域に確かな根を下ろすことができるだろうか”と疑問を呈している。<sup>7)</sup>*

図書館を資料・情報提供施設とみれば、複合施設化によりさまざまなイベント開催や、施設管理の困難さ、音やにおいという問題が発生し、図書館の資料情報提供機能が失われてしまうという指摘である。図書館の目的を資料・情報提供と限定してしまえば、田井の主張に説得力はある。現況正職員の司書が減り、図書館のスタッフが弱体化している中では、業務の選択と集中が必要であり、その中で図書館がすべきことに資源を集中させることは必要である。

一方で、田井の主張に対して、小布施町立図書館以降も地方を中心に図書館が主に公民館との複合施設として設置されつづけていることが疑問となる。主張が、地方の市町村に知られていないというのが理由と考えられるが、複合施設としての図書館が設置されるようになって、かなりの期間がすぎており、そろそろ現実的な課題が出てきてもおかしくなく、複合施設の建設がストップしてもいいと考えられるが、現実的には複合施設は建設さ

れ続けている。筆者が知るだけでも、安城市図書館のアンフォーレや今年オープンしたふくちのちなどである。

地方自治体において図書館、公民館それぞれの建物を建設する余力が失われたというのが、一般的に複合施設が作られる背景であると理解している。合わせて、少子高齢化の進展が激しい地方を中心に、子育て支援やティーンエージャーの場づくりという課題が発生し、自治体は課題に対して対応を求められている。

また、法的な管轄についても検討する必要がある。図書館は図書館法、社会教育法にて規定される社会教育施設であり、生涯学習センター、市民活動センター、青少年センター等については、公民館としての位置づけであれば社会教育法に基づく公民館であり、もしくは首長が設置する一般的な公共施設である。図書館、公民館、博物館の社会教育法に規定される3施設については、教育基本法第3条の生涯学習の理念をうけ、第12条において社会教育として規定され、社会教育法、そして図書館法、博物館法と別個の法律にて規定される施設である。これらの施設は教育委員会が管轄する。また、一般的な公共施設の場合には、地方自治法第244条によって規定され、首長が管轄する。

これまで、社会教育の3施設や、一般的な公共施設は、根拠となる法令が別なこともあり、運営組織も含めて別個に運営されてきた。しかし、社会教育3施設は共に生涯学習の内の社会教育を達成するという共通の目的があるため、2008年の各法律改正により、社会教育の教育活動をそれぞれで奨励することが各施設のおこなうように努めることと法に規定され、サービス面での連携が法にも規定されいている。

しかし、管轄のことなる一般的な公共施設や、同じ教育委員会の管轄であっても、これまで運営が別であった図書館、公民館、博物館といった施設はこれまでの運営経緯や運営体制の違い（例えば図書館は法により入館料などが徴収できないが、博物館については必要最小限の対価を徴収できるなど）もあり、連携は現在でも課題となっている。

今回報告した各図書館は複合施設化を契機に、複合施設の目的に図書館の機能を提供するという、これまでの図書館の目的とは違う目的を施設に設定している。図書館は市民サービスをおこなう一つの機能と位置づけられ、その機能は従来図書館がおこなってきた、資料提供、情報提供である。しかしそれは施設の目的ではなく、目的を達成するための手段の一つでしかない。合わせて、従来公民館でおこなわれてきた生涯学習活動も複合施設の目的を果たすための機能として位置づけられ、「読む・調べる→考える→やってみる・試してみる」という活動がおこなわれる施設が出てきている。この活動を元に、前述の子育て支援やティーンエージャーの場づくりという課題に対応しているのが、本論で示した武蔵野プレイスであり、紫波町図書館であり、ふくちのちであり、えんぱーくであろう。これらを図書館として定義することには困難が伴うが、自治体においては必須の施設として受け入れられている。

図書館にこだわることで、自治体の課題解決に資することができないことは、自治体の1部局としての図書館の存在意義に抵触すると思われる。筆者はこれらの施設について肯定的に受け入れ推奨する。一方それぞれの施設を一般化し検討する際に「図書館」という概念から位置づけることは難しいが、図書館を含む「生涯学習施設」として捉えることで図書館機能を包摂して検討することが可能になると考える。この生涯学習施設は、人口減少がおこるこれからの地方や、都市部でも郊外において、さまざまな課題を一つの建物で

効率的に解決するために、必要性が高まると予想される。

一方で従来の図書館についても、他機関との連携のなかで生涯学習を推進していくことは言うまでもない。えんぱーくのように建物に機能をまとめれば効率的にサービスをおこなうことは可能であるが、通常の市町村においては教育委員会と他の首長部局が連携することは難しい点もある。しかし現実の課題に対応するためには図書館の資源だけで対応することは不可能である。人の交流も含めての連携が従来の図書館では望まれ、生涯学習施設と実質的になっていくことが必要である。

## 引用文献・参考文献

- 1) 武蔵野生涯学習振興事業団. “122. 武蔵野プレイスについて”. 「002. 武蔵野プレイス」.  
(オンライン) (引用日：2017年05月26日.) [http://www.musashino.or.jp/place/\\_1187.html](http://www.musashino.or.jp/place/_1187.html).
- 2) 前田洋一. “理事長挨拶”. 「公益財団法人武蔵野生涯学習振興事業団」.  
(オンライン) c2011年. (引用日：2017年05月26日.) [http://www.musashino.or.jp/\\_1057.html](http://www.musashino.or.jp/_1057.html).
- 3) 武蔵野生涯学習振興事業団. 「武蔵野プレイス」.  
(オンライン) (引用日：2017年05月26日.) <http://www.musashino.or.jp/place.html>.
- 4) 田井郁久雄. “武蔵野プレイス—今話題の図書館の特徴—”. 「図書館の基本を求めて」.  
岡山：大学教育出版, 2014, 第6巻, ページ：96-101.
- 5) オガールプロジェクト. “施設案内オガールプラザ”. 「オガール紫波」.  
(オンライン) (引用日：2017年05月26日.) <http://ogal-shiwa.com/>.
- 6) 福智町. 「福智町公式ウェブサイト」.  
(オンライン) (引用日：2017年06月05日.) <http://www.town.fukuchi.lg.jp/annai/gaiyou.html>.
- 7) 田井郁久雄. “小布施町立図書館を見る”. 「図書館の基本を求めて」.  
岡山：大学教育出版, 2014, 第6巻, ページ：88.

Received : April, 26, 2017

Accepted : June, 7, 2017